

## 『源氏物語』若菜巻・柏木巻における

「推しはかる」——悲劇の根——

相原 咲清香

### はじめに

若菜巻以降幻巻までのいわゆる第二部は、人物設定や人間関係、環境設定など、複雑な要素が絡み合つて展開している。それゆえ、悲劇の原因についても、たとえば、女三宮降嫁先を源氏に決定した朱雀院の錯誤にあつたとする論や、いや、あれは錯誤ではないとする論、あるいは女三宮の虚像を作り上げたとされる柏木論、源氏の愛に失望した紫上という論に対して、愛などというものではなく正妻の地位を失つたことにあるとする論など、様々に論じられている。これら、それぞれの人物における悲劇は、独立して存在するのではなく、相互に関連している。今回は、個々の人物の悲劇というレベルを越えた、悲劇そのもののメカニズムを、作者の技法の面から追求するために、「推しはかる」という動詞を取り上げたい。特定の一つの語を取り上げて論じるだけでは、十分とは言えないことを承知の上で、あえて「推しはかる」という語に注目する理由は、この

語の物語展開に及ぼす効果が、第一部と第二部とは異なっており、第二部における悲劇の根幹に「推しはかる」という行為のあることが見えてくるからである。物語展開との関連を中心に、この語が、若菜巻・柏木巻においてどのように悲劇に荷担しているかということとを明らかにしたい。「推しはかる」は、第一部（桐壺巻―藤裏葉巻）に三五例、第二部（若菜巻―幻巻）に二二例、第三部（勾宮巻―夢浮橋巻）に三八例ある。なお、引用は、小学館新編日本古典文学全集『源氏物語』による。

#### 一 第一部における「推しはかる」

第一部の「推しはかる」は、「風流を解する」ものが四例、時間が何時か、人物が誰かを推測する場合が一例ずつのほか、他人の状態や心中を推測する場合に大別できる。他人の状態や心中を推測する場合、思ひやつたり配慮したりするというプラス評価語、詮索する場合、思ひやつたり配慮したりするというプラス評価語、詮索する・邪推するといったマイナス評価語、感情のプラスマイナスを伴わない語がある。

次に、物語展開との関連について述べると、朝顔巻までの二一例は、特定の人物や事柄に対して「推しはかる」という語が使われているわけではない。しかし、玉鬘巻以降になると、三例をのぞいて、玉鬘、さらには、玉鬘と源氏の仲について、他の人々が推しはかる、あるいは推しはかっていると思うとなつてきている。このような、世間からの推測を懸念する「推しはかる」の用例は若菜巻にも見られる。

則ち、「いかにせまし、聞こえありて、すぎがましきやうなるべきこと、人のほどだにもを思ひ知り、女の心かはしけることと、推しはかられぬべくは世の常なり」(二五二頁)は、源氏が若紫を引き取るにあたり、世間から「すぎがまし」と思われるだろうと気にしている例であるが、ここでは若紫の引き取りを諦めていない。ところが玉鬘巻以降では事情が異なる。胡蝶巻で「人のかう推しはかりたまふにも、いかがはあべからむと思し乱れ」(一八四頁)と、紫上に玉鬘とのことを「推しはか」られることを、源氏が煩わしく思っており、藤袴巻では「いかなるついでにかは、もて離れて、人の推しはかるべかめる筋を、心清くもありはつべき」(三二八頁)と世間の人々の思惑を懸念し、源氏は玉鬘との恋愛をあきらめざるを得なくなるのである。

## 二 女三宮降嫁における役割

第二部では、ほとんどの例が物語展開に関連している。そのうち、女三宮をめぐる一連の物語を、若菜巻・柏木巻に限定して追っていききたい。

まず、朱雀院が出家を決意し、春宮に女三宮のことを依頼したのに続いて、春宮の母である承香殿女御にも折り入って頼む。が、かつて女三宮の母は承香殿のライバルであったので「まことに心とどめて思ひ後見むとまでは思さずもや」(二二頁)と、語り手が「推しはか」っており、ここから、女三宮降嫁の可能性が検討されていく

ことになる。春宮に向けた言葉に見られる、女三宮の将来に関する朱雀院の懸念は、後日再び「思ふ心より外にも見え、宿世のほど定められむなむ、いと軽々しく、身のもてなしありさま推しはからるることなるを。」(三四頁)と繰り返されている。また、引き受け先を探る過程に見られる源氏を評価した朱雀院の言葉には「前の世推しはかられて、めづらかなる人のありさまなり」(二六頁)とある。続く朱雀院の言葉は、夕霧への賛辞でしめくくられて終わるが、夕霧と源氏の比較は再び行われ、二度目の比較によって、源氏への女三宮降嫁へと傾いていくことを考えると、この言葉は、深い意味を持ってこよう。つまり、朱雀院は、危惧される「推しはか」りを避けるために、女三宮を誰かに託す必要がある、その相手としてふさわしい理由の一つが「前の世推しはかられ」るほどの源氏の素晴らしさだったのである。

続いて、女三宮の乳母が、源氏に仕える左中弁に女三宮降嫁の意向を伝え、それを受けて左中弁が乳母に語った場面では、高貴な女三宮が源氏の妻となった場合「いみじき人と聞こゆとも、立ち並びておし立ちたまふことはえあらじとこそは推しはからる」(三〇頁)とある。左中弁が「推しはか」つたことは、その後、世間の人々が様々に推測を交わしていくことの起点と読みとれよう。また、この後に続く「女の筋にてなむ、人のもどきをも負ひ、わが心にも飽かぬこともある」という源氏の「内々のすさび言」(三二頁)について、左中弁は、源氏にふさわしい高貴な身分の妻がいなことだと解釈

している。これら左中弁の言葉は、推測の他、「のたまはずなる」(三一頁)という伝聞の形になっており、断定ではない。しかし、それを聞いた乳母が朱雀院に伝えるときには、「かの院にはかならずうけひき申させたまひてむ、年ごろの御本意かなひて思しぬべきことなるを」(三二頁)と強調される形に変わっており、女三宮を源氏のもとへと、さらに話が進んでいくのである。

### 三 紫上の苦惱

先述した左中弁の言葉に代表されるように、他人が「推しはかる」事によつて犠牲になった人物が紫上である。「かく推しはかる人こそなかなか苦しけれ」(六七頁)と、推しはかられる立場となり、周囲に対して非を見せまいと心を碎くことで消耗していく。女三宮降嫁の話を初めて源氏から聞かされたとき、紫上の心中について「をこがましく思ひむすほほるるさま世人に漏りきこえじ」(五三頁)「人笑へならむことを下には思ひつづけたまへど」(五四頁)などあり、身分の高い妻が現れたことにもまして、外聞を気にするようになつた紫上は、ことあるごとに、心の動揺を見せないように平静を装う。「あまりなる御思ひやりかな」(六七頁)と中將の君たちから評され、源氏からは「ありがたし」と思われるが、紫上自身は、周りに本音を漏らすことができないまま、女樂の翌日病に倒れ、物の怪によつて一時絶命するまでになる。

ところで、先の紫上の引用文中に「苦しけれ」という語が見られ

る。若菜巻において、登場人物達が他の人物を推測するとき、頻繁に出てくるのが「心苦し」という語である。紫上が女三宮降嫁をきつかげに、自分の地位とともに他人からの評価を気にするようになったように、源氏が女三宮を引き取る過程、およびその後の生活の中で、朱雀院と帝を気にしていることは、何度も語られており、そこには「心苦し」という語がたびたび見られる。朱雀院もまた紫上へ消息して返事を得、紫上の筆跡のすばらしさに「心苦し」(七六頁)と感じている。つまり、相手の様子を察して自らの心を痛めているのであり、朱雀院、源氏、紫上、それぞれが、お互いに相手を思いやっていることがわかる。

### 四 「何心なき」女三宮の変化

紫上とは対照的に、女三宮は「若く何心なき」(二七頁)「あまりに何心もなき」(八八頁)「何心なくうち笑みて」(一八四頁)と、「何心なき」姫君として登場する。「何心なき」は、「いはけなし」「幼し」などと並んで女三宮の性格を特徴づける語の一つとなっている。

この語は、「かかる御定めなど、かねてもほの聞きたまひけれど、(中略)さることやあるとも問ひきこえたまはず、何心もなくておはするに」(五〇・五一頁)「何心もなく引き出でて御覧するに、男の手なり」(二五〇頁)に見られるように、紫上が女三宮降嫁のことを光源氏から打ち明けられる直前や、光源氏が柏木からの文を発見する際にある。それぞれ、大きな精神的打撃を受ける直前にあり、

直後のショックとのギャップが浮き彫りになっている。つまり、「何心な」状態ではないような差し迫った状況が背後に控えている時に見られる語なのである。女三宮についても、柏木が忍び込んだ時「何心もなく大殿籠」(二三三頁) っていたのは、右に挙げた例と同様である。

ところが、最初に挙げた、女三宮の性格づけに際しては、裏に何もない点が注目される。源氏が柏木からの文を見つけた時も、「何心なく大殿籠れり」(二五〇頁) とある。ショックを受けて自覚が変わった紫上や源氏とは対照的に、密通後、源氏への発覚を恐れながらも、相変わらず「何心な」人物として設定されている。

しかし、そのような女三宮もまた「推しはかる」心を持つようになっていく。柏木臨終の際、女三宮からの文を柏木が見る場面、書面に「ただ推しはかり」(二九六頁) とある。小侍従が「責め」たので「しぶしぶに書い」たという文であるから、どの程度なのかはわからないが、「何心なき」人物とされてきた女三宮が、柏木の臨終に際して「推しはかる」人物となつていく。その結果、女三宮はどう変わったか。以前は「老いしらへる人」が、源氏の女三宮への愛情の薄さを非難しても、自身は「何心もなく」(七三三頁) という状態であったのが、密通の事情を知らない「老いしらへる人など」の、源氏の薫に対する処遇への不満を「片耳に聞き」、「さのみこそは思し隔つることもまさらめ」(三〇一頁) と出家を志すようになり、源氏の引き止めを振り切つて、朱雀院の後押しにより出家を果たすの

である。

## 五 柏木と源氏の誤測

密通場面で、柏木は当初「ただかばかり思ひつめたる片はし聞てえ知らせて、なかなかかけかけしきことはなくてやみなむ」(二二五頁) と思つていた。その願望は「よその思ひやりはいつくしく、もの馴れて見えたてまつらむも恥づかしく」(同) という「推しはかり」によつて成り立つていた。ところが想像していた女三宮像と実際とは違つており、そのことが柏木の理性を失わせた。

出家後の女三宮に「なほあはれと思せ」(三三二頁) という源氏は、密通場面で「あはれとだにのたまはせば、それをうけたまはりてまかでなむ」(二二五頁) と自身への「あはれ」という言葉を宮に繰り返し懇願した柏木と重なつてくる。柏木に「つゆ答えもしたまはず」(二二五頁) という女三宮は、源氏に対しても「御答へもなうて」(三二五頁) とあり、女三宮が答えないことを「ことほり」と受け止める点でも柏木と源氏は共通している。密通以前の柏木の女三宮への見方が、密通後、現実を思い知らされた源氏に同じ語で繰り返されていることをどう捉えればよいのであろうか。

密通発覚後、源氏が女三宮に対して冷たくなつたのは、単に密通を知つたためだけではない。「御答へもなうて、ひれ臥したまへり。ことわりと思えば、強ひても聞こえたまはず。いかに思すらむ、もの深うなどはおはせねど、いかでかただには、と推しはかりきこえ

たまふも、いと心苦しうなむ」(三三五頁)とあり、柏木の死後、女三宮の心中を「推しはか」って「心苦し」という状態になつてゐる。

源氏の眞の悲劇は、密通の事実そのものを知つたことよりも、女三宮が柏木に心を許したと誤認していることに始まつてゐるのではない。以下に、源氏の心中を抜き出してみる。「さばかりの人に心分けたまふべくはおぼえぬものを」(二五五頁)「ただ人の聞こえなす方にのみ奇るべかめる御心」(二六九頁)「かのこまかなりし返り事は、いとかくしもつつまず、通はしたまふらむかしと思しやるに、いと憎ければ」(二七一頁)とあるように、源氏は「さばかりの人」

「ただ人」つまり柏木風情にと苦々しく思つたり、嫌みを言つたりしており、朱雀院へ返事を書けない女三宮を見て、柏木へは包み隠さず返事をするのだからと疑つてもゐる。しかし、女三宮の柏木への感情を見ると、密通場面では「あさまし」「むくつけし」(二二四頁・二二六頁)「うるさし」「わびし」(二二七頁)という感を抱き、その後も、「めざまし」(二四三頁)「心憂し」(二四七頁)とあつて、源氏の思うように柏木になびいてゐる様子はない。

女三宮の柏木への気持ちを誤解してゐる源氏は、女三宮を苦々しく思う一方で、密通後の女三宮を「らうたし」と感じてゐる。この「らうたし」「らうたげなり」は、密通以前、柏木が女三宮に対して感じていたものであり、源氏は女三宮降嫁の際の紫上に対して感じていた。密通発覚後、源氏には、憎いと思う一方で女三宮に惹かれる気持ちが生じてゐるのである。

また、密通のあつたことは、小侍従しか知らないのだが、蕨誕生時には、「この事の心知れる人、女房の中にもあらむかし、知らぬこそねたけれ、をこなりと見るらん、と安からず思せど」(三二四頁)と、他にも密通を知つてゐる者がいて、さぞかし自分を笑つてゐることだろうと心を波立たせてゐる。

つまり、「推しはかり」と現実との乖離が悲劇につながつていく点で源氏と柏木とは共通してゐるといえる。

## おわり

これまで見てきたように、朱雀院が女三宮の処遇の仕方を画策するきっかけとして始まつた「推しはか」という行為は、紫上、女三宮、柏木、源氏にも見られ、それぞれの人物の苦悩につながつていく。紫上は「推しはかられる」立場に置かれて苦しみ病に倒れる。

柏木は長年に渡つて憧れの女三宮像をつくりあげ、現実には逢つた宮の「推しはか」りとは違ふ姿に、理性を失つて密通に及ぶ。「何心もな」い状態でそれなりに幸せであつた女三宮は柏木巻で「推しはか」ることのできる女性へと変貌をとげ、その悩む姿が、源氏にとつて「らうたげ」に映るようになる。そして、源氏は、女三宮が柏木に心を分けたと誤測し、鬱屈してゐる。このように、若菜巻・柏木巻において、「推しはかる」ことによつてもたらされた心の動きが、悲劇へとつながつてゐる。

第一部では周囲の人々の「推しはかる」行為が、源氏に玉鬘との

恋愛をあきらめさせる一因となったが、それはマイナス状況につながっていない。むしろ、玉鬘は身の処し方を誤らなかつたということが、若菜巻において真木柱結婚の際に玉鬘自身によって確認され、また、密通後、女三宮と比べる形での源氏の言及もある。若菜巻における玉鬘の結婚を正しいものとする二度に及ぶ確認は、第一部に於いてトラブルをさしとめた「推しはかる」が、第二部に於いては悲劇の根幹にあるという対照性を浮かびあがらせている。

「推しはかる」ことによつて、紫上や源氏は、それ以前に持たなかつた新たな自覚を持つようになる。けれども、両者の「推しはかる」は、憶測することであり、事実関係を深めることにつながっていない。若菜巻から柏木巻においては、推測が当たつては、当たつていないにかかわらず、また、ともなわれる感情のプラスマイナスに関わらず、「推しはかる」という行為によつて生まれた苦悩が、それぞれの登場人物を追い込んでいくのである。

「推しはかる」の他にも、「思ふ」「思ひわたる」「思ひめぐらす」「思ひよる」など「思ふ」の複合語や推量の助動詞、あるいは「にや」という疑問形で、多くの事柄が推測されている。若菜巻以降、推測が推測を呼び、あるいは、推測が事実として語られることによつて、物語が展開し、悲劇性を帯びていく。憶測を重ねることでも物語が暗転していくのであり、「人間の心が生み出す悲劇」が作品構造の核となつていくといえよう。

——あいはら・さやか、銀河学院高等学校——